

# 碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可

神奈川 碩心会 松行

61年7月現在 会員数  
170名  
284名  
62名  
(516名)

61年7月号 (168号)  
発行 者 萃  
根 岸 岳  
編 集 者  
中 村 愛 岳

## 心と目の研修の旅

一 柳道風

青葉目に入る好天の五月、生徒と共に泊の旅に出ました。大船より鈍行に乗り、熱海までのんびり一時間、最初の目的地妙智観音へ。同観音は日本最古の不思議な観音様。今から千三百年前、名仏師吐利の作と云われ、女身の御秘像妙智観音とは世界の聖将東郷元帥が御名を贈られたそうです。住職のお話を聞きながら、諸仏像を見学して、人間の原点に返って学ぶ事多く御話も面白く、心に深く感じ、始めて知る女生徒達も何かと心に刻んだ事としました。仏像の台座ハスの花についても学ぶべきお話もありますが、又何かの折に記述致します。夕刻本日の宿熱海別館で一日の疲れをとり夕食、大宴会場にて合吟練習、そしてカラオケに何もかも忘れ、夜のふけるまで。

海と吟の中に入り込んでしまい、只々胸がジーンと熱くなるのみ、あゝこれが本当の吟だと、我に返りし時は、日も真紅より黄色味がより地平線をはるかにはなれてしまった。素晴らしき哉吟道一生の思い出の朝更に勉強を心に誓う。

好天に恵まれた二日目、MOA美術館へ。私達の目はふだんふれる事の出来ぬものばかり：一つ一つ書く事もできませんのでコースのみ記します。平兼盛像外、多くの仏像、茶の湯の美術、秀吉ゆかりの幻の茶室（黄金）一白庵、只々目をおおうばかり：日本の古典芸能舞台、この舞台で吟じてみたいとは夢なる哉。明治・大正の木版画生花の美術、北斎と広重展、物語絵に見る王朝文化への憧憬、一度庭園に出ずれば尾形光琳の屋敷樵亭茶屋、何を見ても見事なものばかり：心と目は全て吟道につながり奥深いものばかりでした。帰りぎわに賤ヶ嶽一本槍の一人片桐且元の片桐門と唐門を見学、熱海の家を一望してあとに心を残しつつ一路帰路につきました。折がありましたら皆々様も一見をと追記して心と目の研修を終わります。

日出つる 舟出の海や 波の帯

日昇る 静けき朝や 鳥の声

第十一回

碩心会温習会盛会に終る

逗子A 渡辺 秀岳

六月十五日(日)真夏を思わせる様な天候のもと、第十一回碩心会温習会が逗子図書館ホールに於て行われました。

定刻通り沼田洗岳先生の開会の言葉に始まり、千葉香岳先生先導の碩心会の詩の大合吟は緑深き逗子の山々にこだまして身おひきしまる思いでした。

満席の盛況のうちにプログラムも進み、昼食事には、普段お目にかゝれない方々とも久しぶりにお逢いして、何時にも変らぬお元氣さに喜び合っている姿等も見受けられ嬉しく思いました。

許証授与に入り、根岸岳萃先生より許証を読みあげられ、お目出度うと言つて渡される時には、審査の時の苦勞も忘れて、皆様さすがに嬉しそうでした。又、中村幸岳先生御夫妻、千葉劔岳先生御夫妻が相揃つて壇上に立たれた姿はなんと素晴らしい、深い感銘を受けました。

恒例のコンクールも吟者は勿論のこと、見守る方々も息をのんでの応援ぶり、熱吟がつづき、いづれ劣らぬ見事な成績で日頃の熱心な練習ぶりを物語つておりました。

午後からは思いがけなく松井洋先生が御出席下され、皆さんも一段とはりきった様子に思えました。指導者吟詠、役員吟詠と進み、模範を示していただき、さすがとつくづく感じさせられました。最後に松井岳洋先生が「椰子の実」を吟詠され、いつにも変らぬ素晴らしい吟声に場内は水を打ったように静まり、只うっとり聞き惚れてしまい、思わず溜息が出てしまいました。八十三才という御高令でいらっしゃるのに、矍鑠としたそのお姿には敬服いたしました。どうぞいついまでもお元氣でと願わずにはいられませんでした。

午後四時三十分、千葉劔岳先生の閉会の言葉につづき、三井岳龍先生の元氣いっぱいの万才の声に、皆様も負けじと、元氣いっぱい天までとどけと三唱し、盛会に終りました。

温習会役員としての所感

(受付係) 森田暁岳

私も責任者という大役を仰せつかり、早朝から皆さんと一緒にやらせていただきましたが、梅雨の最中というのに好天に恵まれ、出足も好調、定刻に開会出来、欠席も少く、無事に役を終らせていただきました。

(進行係) 沼田隆風

温習会の進行係をやってくれと支部長に頼まれて軽い気持ちでOKした。責任者だけはいやだなあと思っていたが、プロを渡されて予感的中してしまった。今まで進行係も二、三回やっているが、長たる本人だけは承知しているだろうが、其の他は何も分らず不安感が大きかった。今回これではまずいと進行係作業分担表の作成にかゝった。まずいちはん困ったことは、名前による男女別が全然分らない。全員14名、奥伝以上が7名いたので、七分割して7部作成した。

当日8時40分会場に着く。皆さん心配そりな顔をして私より早く待っていてくれた。まず分担任者に書類を渡し、相手の顔を覚えてもらうこと、不都合あらば前もって交代して下さいと注意する(二、三の交代はあった)定刻前千葉先生より種々注意あり。

第一部会員吟詠。1番堀内「九月十日」例によって例の如く、後から見ているとひざがこきざみにふるえはじめ、だんだんふるえが大きくなり、今にも倒れはしないかと心配したが、最後までやり通したのでこちらがホッとす。初心者の方を思い出すひとこま。そこですかさず沼田先生より

会場静粛と、進行係の足が下からまるみえと注意あり、すぐ会場静粛をお願いする。26番松和：すかさず千葉先生より松和と云うように注意あり。なかなかきびしいなあと思う。小さな間違いはあったが、大過なく終らせていただけたのも皆様のお蔭と感謝しております。

(会場係) 松井正風

八年程前だと思えます。私がまだ詩吟を習い始めて一年も経っていません。はじめて温習会の会場係を頼まれました。その時は会場係ってなんだろう。何をしたらいいのだろうと心配で夜もろくろく眠れない取越苦労をした記憶があります。またその頃は気楽に話の出来る吟友も少く、先輩の方達に教えていただきながら夢中になつて作業をしたことがあります。会場係ってとっても疲れる係なんだなーとつくづく思いました。

以前根岸先生のいられる前で、又会場係かーと不満をもちました。又会場係その時先生は笑いながら「松井さん、おそらく理事長の松井先生だって昔は会場係をなさったことがあると思えますよ」と云われたことがあります。それから係の事での不満は云わないことにしました。今回第十一回傾心会温習会の会場係をお手伝い

させて頂き、数年前の自分を思い出しながら随分仕事にもなれ、気楽に声のかけ合える吟友が増えたものだと感じ、又感謝の気持ちでいっぱいでした。数年の間に、全国大会、県大会、地区大会、傾心会の大会、温習会などの会場係のお手伝いをさせて頂き、大変よい勉強をさせて頂きました。

今回の温習会では、係の責任者の要領のよい指示、又新しい吟友達がとてもよく動いてくれましたので、私などは大変楽をさせて頂けました。特に慣れた人が責任者になると皆大変動きよいものです。勿論傾心会員の皆様の協力があったればこそですが、これからも今迄の経験を活かし、会の皆様のお役にたちたいと思っております。

(コンクール係) 矢嶋悦岳

私も傾心会にお世話になり、はや十七年目に入りました。毎年の温習会もコンクールに参加させていたゞいたり、指導者になつてからは班の皆さんのお世話と、自分の吟詠にのみ心を入れ、それで当然のことの様に思っております。

この度コンクール係をお受けし、何日も前から色々準備し、又手落ちのない様に一日中緊張の連続でした。千葉先生、中村先生にもお世話をおかけし、一つの行事が如何に大変であるかと諸先生方の御苦労が

身に沁みて分り、わがまゝに過ぎて来たことを反省しております。

末筆で申し訳ございませんが、松井岳洋先生が舞台にお入りになり一礼されて椅子にかけられました。礼に始まり、礼に終ると知りつゝ実行出来ない私ですが、先生の姿に胸つまる思いでございました。

(接待係) 一之瀬汀風

第十一回吟道温習会にて、接待係を受持ちました。さぞ大変な事と思つていましたが、係の皆さんが心を一つに、手ぎわよく弁当、お茶等それぞれに気くばりよく終ることが出来ました。係の皆さんほんとうに御苦労様でした。

◎ 常任理事会ひらかる

6月27日(金)7時より桜山下会館に於て、50周年記念吟道大会準備に関する件、その他の議題が取りあげられました。

自然と人生 (七月)

(夏)

……今日初めて囁(ささや)の声を後山に聞きぬ。一声さやかに銀鈴を振る如し。白日山に入り、涼は夕と共に生ず。外に出づれば、川に釣る人あり、談笑の声あり。笛声あり。花火を揚ぐる子供あり。七月十日

## 練吟メモ

○各教室とも、短歌の新しい朗詠法に取り組んでおられることと思います。そして練習のたびに、毎回口にされるのが「肥後調」であると思われます。肥後調の朗詠法は、各教室で指導されることですので、ここでは「肥後調」の語の出所をご紹介します。いただきます。

○木村岳風先生は、昭和二年二月末（当時27才）に全国詩吟奨励行脚を開始されました。まず静岡県下の工場から始め、三月には京都に入り、こゝでは主として大学を対象として詩吟を講習。つづいて大阪、兵庫、岡山と、山陽道を下りながら、各地で詩吟の普及をはかり、また修業されました。

○熊本に着いた先生は、東京を発つ時から用意していた「紫垣正弘」という剣道家を訪問しました。以下は、紫垣剣道範士が當時を回想してのお話です。

○木村先生が熊本に來られた時のことです。武徳殿で剣道の稽古をつけていると、木綿の絆に木綿の黒紋付を着た一見壮士風の者が訪ねて來た。控間に通っていたたく。開口一番「肥後流和歌の研究に來ました。放送局で聞いたのですが高名の方は三名いら

っしゃる。既にほかの二先生にお会いしたが、ご高令でしかも非常に音程が高い、そこでぜひ先生の聞かせていただきたい」とのこと。私もことさら高い調子でやってみた。先生は「肥後吟の調子は高いですね、私はそんな高い声は出ません」と言って帰って行かれました。

○その後数年して、横浜の八聖殿の詩吟大会で、私は肥後流の和歌を初めてやってみた。そして熊本に帰ったが、日ならずして突然先生が訪ねて來られて言われるには「全国を廻って見て、肥後流ほどうい和歌の朗詠はない。ぜひ教わりたい」とのお話。恐縮したが、折角、東京から熊本まで出向かれた先生。私もすっかり感激。宿を引払っていただいで、拙宅の二階にお出で願った。一週間ほど滞在していただき、さすがは先生、見事に会得してお帰りになった。○以上は、日本詩吟学院編「木村岳風」から収録したものであり、学院が使用する「肥後調」の語の出所が明らかになっていきます。ただし、木村岳風先生は、この時の肥後調を十分そしゃくしたりえて、岳風調に取り入れてあるものと思料されます。このメモの資料である「木村岳風」伝は、お持ちでない方がかなりあるようですので、参考にしていただければ幸いです。

### (移籍)

73 佐竹梢風 桜山A支部より逗子A支部へ

### (入会)

748 海津勝子 鎌倉市浄明寺二八七

(逗子B) (電)〇四六七―二三一―一六四六

749 朝比奈陪夫 横浜市神奈川区三ツ沢下町

(松和) (電)〇四五一―三二一―一八六七三

750 岡田久仁彦 横浜市旭区左近山団地

(松和) (電)〇四五―三二二―二〇四

751 兼田久美子 茅ヶ崎市萩園三〇〇―一六

(松和) (電)〇四六七―五八―四五三〇

752 篠崎隆 相模原市矢部二―一八―四

(松和) (電)〇四二七―五九―一五〇八

753 高田修平 鎌倉市今泉台六―七―八

(松和) (電)〇四六七―四五―二三四六

754 田代公次 横浜市戸塚区岡津町一―五七

(松和) (電)〇四五―一八―一九五〇八

755 村井登代子 逗子市沼間一―二―九

(沼間) (電)〇四六八―七三―五一四三

756 金子いし 葉山町堀内一五〇九

(堀内・D) (電)〇四六八―七五―三九一四

### (退会)

32 渡辺秀風(大船A) 447 岡 梅山(風 早)

542 鈴木 満(堀内F) 565 足立原貞泉(沼間)

568 川守田幸子(沼間) 703 鈴木利恵(堀内・F)